

## 平成 28 年度第 1 回仙台市認知症対策推進会議 議事録

開催日時：平成 28 年 6 月 7 日（火）18 時 30 分～20 時 15 分

開催場所：仙台市役所本庁舎 6 階第 1 会議室

### 【委員（五十音順・敬称略）】

（出席者）

- 安倍 邦明（社会福祉法人仙台市社会福祉協議会）  
阿部 哲也（認知症介護研究・研修仙台センター）  
井上 博文（みやぎ小規模多機能型居宅介護連絡会）  
大橋 洋介（仙台弁護士会）  
賀澤 敦子（宮城県精神保健福祉士協会）  
菊地 昭三（仙台市老人福祉施設協議会）  
古積 美栄子（特定非営利活動法人宮城県ケアマネジャー協会）  
佐々木 薫（認知症介護指導者ネットワーク仙台）  
鈴木 佐和子（宮城県老人保健施設連絡協議会）  
蘇武 徳典（公益社団法人認知症の人と家族の会宮城県支部）  
高橋 将喜（一般社団法人仙台市薬剤師会）  
三浦 啓伸（一般社団法人仙台歯科医師会）  
矢野 直美（仙台市地域包括支援センター連絡協議会）  
山崎 英樹（認知症疾患医療センター いずみの杜診療所）【会長(議長)】  
蓬田 隆子（特定非営利活動法人宮城県認知症グループホーム協議会）【副会長】

（欠席者）

- 浅沼 孝和（一般社団法人仙台市医師会）  
太田 みどり（公益社団法人宮城県看護協会）  
丹野 智文（公益社団法人認知症の人と家族の会宮城県支部）  
原 敬造（一般社団法人仙台市医師会）

### 【事務局】

仙台市健康福祉局  
各区保健福祉センター障害高齢課

### 【オブザーバー】

公益財団法人仙台市健康福祉事業団介護研修室  
認知症疾患医療センター 仙台西多賀病院  
宮城県保健福祉部長寿社会政策課

## 【会議内容】

- 1 開会
- 2 挨拶
- 3 出席者紹介

議事に入る前に、山崎議長より次の確認が行われた。会議の公開・非公開の確認については、公開とすることで委員より異議がなかった。また、議事録署名人については、安倍委員とすることで委員より異議なく了承された。

## 4 議事

- (1) 平成 27 年度仙台市認知症対策事業の実績について（資料 1）
- (2) 平成 28 年度仙台市認知症対策事業の取組み方針及び計画（資料 2）  
（事務局より説明）

（山崎議長）

只今の説明につきまして、委員の皆さまからご質問、ご意見等はございますか。

（蘇武委員）

様々な形のお話をされた後で恐縮ですが、中身のボリュームは確かにあるのですが、その成果をどのようにとらえられていらっしゃるのか、いつも気になっています。毎回話させていただいていますが、サポーター養成講座、沢山の受講者がいて、オレンジリングを持っている人がいることはいるけれども、その人達がいつも悩んでいるのは「その後、何をしたらいいのか」ということ。実際にサポーター養成講座の内容は、それを受けたからといって関わりの中身が分かるわけではない。そのところをどうとらえておられるのか。それがフォローアップ研修であって、昨年度末に 1 回実施されましたが、受講者の方のお話を聞いてみると、「聞いたけれど自分の求めるものではなかった」という声も聞いている。それは、その講座を聞いて、「私が身近にいる人にどう接すればいいのか具体的に解らない」、それからせつかく養成講座を受けた人々が地域で活かしきれなくて埋もれているという状況がたくさんある。そういったところを積極的に改善いただいて、今後総合事業で必要となる人材を早急に活用できるシステムをぜひ構築してほしいと思います。それから、今後の取組みの中で、資料にも書いてありますが、データを見ても町内会や民生委員さんなど、地域の核になる人に対しての教育というかサポートをもう少し強くして頂いて、本当に皆さんが必要としている地域で安心して暮らせる社会づくりのために地域資源を育てるということに、今年もう少し力を入れてもらいたいと思います。

(事務局)

ご意見ありがとうございます。認知症サポーターの件につきましては今、裾野を広げるところでいろいろな方々に普及したいと考えていますが、今後、受けた方々のスキルアップというところを考えていければよいと感じました。それから地域の核になる方々とのつながりにつきましても、今後検討していきたいと思っております。

(古積委員)

昨年、病院勤務の医療従事者向けの認知症対応力向上研修を開催していただいておりますが、今年の医療費の改正で、認知症患者の入院を受け入れることに対する加算が付き、また、医療・看護必要度の中にもポイントが付くという改正がありましたので、認知症の方を理解していただいてケアしていただかないと、いくらポイントや加算が付くといっても難しいところがありますが、今年度また、そのような病院を対象に研修を企画する予定はあるのでしょうか。

(事務局)

今、医師会と研修開催等については検討調整しているところでございます。今年度も実施していくことを考えております。

(高橋委員)

今、薬剤師会では早期発見に力を入れているのですが、認知症サポーターの方もケアだけではなく、どこかに繋いでいくシステムを作っていただくと、働きがい・勉強のやりがいがあると思いました。私達は地域包括支援センターに繋いで、そこからかかりつけの医師あるいは地域の医師に繋いでいく流れを作っていますが、それにサポーター養成講座で学んだ方もその流れに乗っていただけるとやる気も湧くのではないかと、埋もれているという感じは無くなるのではないかと思うのですがいかがでしょうか。

(事務局)

最初に出会う方々が、この方はもの忘れがあるとか認知症の症状があるのかなと気づいて次に繋げるということが、皆さまがおっしゃるように大事なことだと思いますので、今後サポーター養成研修を受けた方々がどのように地域の中で活躍していくかということの参考にさせていただき、今後検討させていただきたいと思っております。

(大橋委員)

弁護士会の方では、前もこちらで報告させていただきましたが、弁護士会と宮城県社会福祉士会の方で、認知症も含め、高齢者や障害のある方を支える人をさらに支えるようなシステムをつくり、問題を抱え込まないよう、何か難しい問題があった時にはアド

バイスできるようなシステムをつくろうと昨年1年間やってきまして、今年の1月から具体的に動き出している状況です。それは必ずしも認知症の高齢者に限ったものではなく、障害者を広く含めて取り組みをしているところです。

実際にそのような体制を作ったところで、ではそれを動かし始めるのは誰なのかといえば、当然地域の目であったり、地域の耳であったりだと思います。私が講演会等で話していることは、とにかくまずいろんなことを知ってくださいと言っています。そして知った上で問題だなと思った時に一人で抱え込まないで適切な所に繋いでくださいと話しています。ですので、いろいろな難しい知識を教えるのは大事だと思いますが、この問題についてどこに繋がればいいのかということ積極的にサポーターの方にお伝えしている形にしていただければ、弁護士会が作った制度も動き始めることができるでしょうし、もっと言えば立派な制度を作っても最前線でそれを動かす人がいなければ絵に描いた餅になってしまうので、次に繋ぐという意識を持っていただきたいと思います。

(事務局)

サポーターのみならず地域の方々がより認知症のことを理解し、何か困ったことのある方に手を差し伸べて繋ぐ、その繋ぎ先の啓発が大事だと今のお話を聞いて感じましたので、今後の検討の材料にさせていただきたいと思います。

(高橋委員)

私は学校薬剤師というものもしておりますが、昨年度も学校で認知症サポーター養成講座などを開催されたということですが、これをもっとどんどん広げていってもらいたいと思います。というのは、核家族が多くなっており、自分の家にお年寄りの方と一緒に住んでいない子供が多いので、お年寄り方がそういうふうになることが解らない、理解されない子供が多いということが一点と、子供が学校でそういう話を聞いてきたと言うとお父さんお母さんも結構関心を持つという話を聞いているので、ぜひ教育委員会に働きかけて、もっと増やしてもらいたいと思います。

(矢野委員)

今の学校に関連した話ですが、小中学校に働きかけを地域包括支援センターの方でも毎年しておりまして、校長先生によってできる時とできない時があるということで、私も1年、2年、3年と働きかけてもなかなかできなかったことがあったのですが、昨年8月に厚生労働省から教育長に対し認知症サポーター養成講座を積極的にやってくださいという文書が出たとたんに、やらせていただくということに繋がった経緯がありました。やはり関係団体、行政の方から働きかけてくれると、なかなか動かないところを、双方から動かすことができると実感したケースがありましたのでお話をさせていただきました。

(事務局)

仙台市でも教育委員会と打ち合わせをいたしまして、今年度7月に教員向けの研修会を開催予定ですので、行政としてその辺りの啓発をしていければいいと思っておりますので、地域包括支援センターでも今後ともぜひよろしくお願いいたします。

(三浦委員)

歯科医師会としては、昨年初めて早期対応のための研修会に参加させていただき、今後はもっと裾野を広げて、いろいろな先生に知ってもらいたいと思います。来院される患者さんに疑わしい方がいてもデリケートな部分もあるのでなかなか言いづらいと聞いたこともあるので、知識がまだまだ足りないと思いますので私達ももっと勉強していきたいと思います。よろしくお願いします。

(蓬田委員)

二点ありまして、一点は、丹野さんのビデオレター普及の件ですが、これの文言、お話は本当に心深く感じる場所のあるメッセージで、たくさんの方にぜひ生の声として聞いてほしいと感じましたが、これをどのように普及させていく予定なのかお伺いしたいです。

もう一点ですが、実績として特養とか老健・小規模などがありますが、24時間の随時対応のサービスについては今どのような実績と今後の予定があるのか、といいますのは身近な人でやはり在宅で見ていきたいけれど、結果として仕事を辞めざるを得なかったという事例がありましたので、この点についてお話をいただければと思います。

(事務局)

最初に丹野さんのメッセージビデオの件でございますが、YouTubeにアップしていますが、その他に全国の認知症に関わる行政の担当者から問い合わせ等がございます。また、DVDがほしいという方には送らせていただいたりしております。

次に定期巡回・随時対応型訪問介護サービスについて、仙台市内でどれだけの地域をカバーしているかですが、まだ事業を実際実施してないが事業者として選定したというところを含めまして、市内で63中学校区中、まだ事業者が決まってないとか、事業が開始されてない、いわゆる空白が4中学校区でございます。では、実際の利用者がどれだけいるかというところと28年の4月末現在で140名の方がご利用いただいている状況でございます。

(蓬田委員)

高齢者住宅ではなく、在宅の人の数がもし解りましたら教えていただきたいのですが。

高齢者住宅の集合住宅ではなくて、あくまで個人の自宅として関わってらっしゃる人数がもし解りましたら教えてください。

(事務局)

申し訳ありません。その区分けの数字は今持っておりません。

(菊地委員)

仙台市老人福祉施設協議会として、特別養護老人ホームの立場で地域包括支援センターからいろいろなケースがあつて何とか引き受けてほしいというものが頻繁に来ていますが、地域で、在宅で暮らす方々が、物忘れがひどくなって、被害妄想がひどくなって、警察沙汰になってようやく話が回ってくる場合があります。その前に、もっときちんとやってくれていたらなということがいっぱいあります。

まず、先ほど子供の学校の話がでていましたが、特別養護老人ホームにも小学校 3、4 年生が体験で来ると、まず入居者のおじいちゃん・おばあちゃんを見てびっくりした顔をして、こういう人達がいるのか、初めてお年寄りを見たという方がいます。サポーターを育てるといっても、まずはそういうところから知ってもらうことから始めて、それが中学生になって職場体験活動になって、高校生のボランティア活動になって、それがサポーターというものに繋がっていけばいいと思っています。

地域の人達に、認知症といってもいろんな症状があつて、こういう場合も認知症になっていることを知ってもらって、それを皆さんに知らせるのが地域包括支援センターであり、それぞれの関係機関であると思ひながら、我々としてもできるだけ努力していこうと思っています。

(山崎議長)

丹野さんのメッセージビデオとケアパスは、全国的に見てもかなり画期的で評価を受けていると思いますが、この辺の反響は市の方でいかがでしょうか？

(事務局)

結構遠くの自治体からもビデオ、YouTube を見ましたという反響がございまして、そしてケアパスについては当事者の方の目線を持って作ったということが、「こういう形のケアパスはないね」という評価をいただいております。当事者の方にご協力いただいてケアパスを作ったことや、メッセージビデオを作ったということは、私達としても丹野さんに本当に感謝しております。

(山崎議長)

余談ですが、今日、スコットランド認知症ワーキンググループに関係されていて、ネ

ットワークづくりをしているフィリーさんという方が仙台にいらっしゃいました。NHK が連れていらしたわけですが、NHK の担当の河村さんは、日本の先進的なところとして、仙台を推薦してお連れしたということで、あちらの方もおっしゃっていましたが、メディカルモデルからケアモデルで、今シチズンモデルという医療モデル、介護モデル、市民としてどう主体的に活躍していただくのか、治療を受ける側あるいはケアを受ける側ではなく市民として生きる側ということで、主語が逆転するということをスコットランドでは今取組んでいるということです。日本でもその動きでは仙台が先端を行っているということで、丹野さんのケアパスとビデオレターは非常に画期的な事だと思っております。

さて、次の議事 (3) その他といたしまして、まずは、太白区の実践「認知症を支える地域づくり事業」として、高齢者が健やかに暮らし続けられるように、認知症をテーマに地域での支え合いの大切さを理解するために、地域の方とともに取り組んだ事業について、事務局から説明をお願いします。

(事務局)

参考 1 の資料「太白区認知症を支える地域づくり事業について」をご覧ください。こちらの事業につきましては、区民協働まちづくり事業として、認知症を支える地域づくり事業を平成 26 年度から太白区で実施しているものです。太白区は区内に 12 の地域包括支援センターありますが、4 ブロック・3 包括ずつ、太白区の中央部と東側・北側・西側の 4 つのブロックに分けて 1 年間に 1 回、1 ブロックずつ新規に開催しまして 4 年間で区内一巡するという形で始めたものです。対象としては、地域で核となる方々にまず分かってもらいましょうという形で、民生委員・児童委員の方や町内会の役員の方・老人クラブの役員の方・圏域内事業所等に声をかけて行いました。会場としては市民センターなどの協力も得て開催しました。

26 年度と 27 年度の報告書を見ていただきたいのですが、最初に共同開催ということですが、大きな事業を行って、全包括に声をかけて、それぞれの包括ごとに工夫して講師の先生を招いて実施するという形で行っております。26 年度では、地域の内科の先生が講師になったり、弁護士会から先生をお呼びして講師になっていただいて、地域の事業所、不動産業者や金融業の従事者の方も巻き込みながら講座を開いたり、薬剤師会から薬剤師の先生に来ていただいて事業を行いました。

27 年度につきましては、こちらの委員になっている蘇武委員にも講師になっていたり、認知症の人と家族の会の方にも講師になっていただいてお話いただいたり、いずみの杜診療所の川井先生にも講師になってお話をいただいたり、警察に声をかけてお話をしてもらったり、それぞれの地域の特性に合わせながら講師を選んで開催しているところです。

今年度は八木山地区でいろいろ工夫しながらやっているところです。参加した方々か

らのアンケートによりますと、今まで町内会の集まりとか、認知症を隠す地域だったけれど、自分が理解して今度町内会の集まりで話をしたいとのことで、包括の職員が講師として依頼されることにつながったりしております。1回開催したから終わりではなくて、翌年その次も少しずつ広がっていつている印象があります。

課題としましては、地域では認知症の関心がすごく高くなっているというのは私達も肌で感じていますが、それにどう答えていくかを考えなければいけないことや、先ほどもありましたが関心の無い人もいるわけなので、関心の低い方にはどんなアプローチをしていくか、また、区役所でもいろんな事業をやりがちですが、それがバラバラではなく繋がっていつて同じ方向に向かって、地域での支える力をつけていければいいなということで、地域課題として会議の中で共有させながら同じ目標に向かってやっていければいいなというのが今の感想です。

(山崎議長)

ありがとうございました。今のご報告に関しまして何かコメント等ございませんか。

では次の議題にも絡むところかと思しますので、次に、認知症カフェに関する意見交換とさせていただきます。

(阿部委員)

今やっている取組みのご報告をさせていただきます。参考2の資料「認知症カフェ・家族交流会」の一覧の中の一番目に記載されている「土曜の音楽カフェ」は、認知症介護研究・研修仙台センターが事務局といたしますか推進役となりまして、昨年度10月から始めています。元々は仙台市と東北福祉大学の「認知症対策推進に関する連携協定」がありまして、その中の一環として私達仙台センターの企画という形でやらせていただいて、昨年度4回程、場所は東北福祉大学のステーションキャンパスで、できるだけ住宅街の中にあつて地域に根ざした誰でも寄れるような、カフェという名前が付いているので交流会でもなく教室でもなく、カフェという名前を付けたコンセプトをいうと、誰でも寄れる場所を選んでその中で週一回土曜日開催しております。

担当者は、認知症カフェの発祥といわれているイギリスとオランダに視察に行つて話を聞いてきました。その中で、オランダとイギリスのモデルは違うということで、オランダモデルの方が認知症カフェのコンセプトがかなりしっかりしており、担当が考えているカフェのスタイルに近いということで、オランダモデルのカフェをこの土曜の音楽カフェで実施しています。オランダモデルの特長ですが、基本的には地域住民は当然ながら、町内会や民生委員や専門職を入れて、ご家族は当たり前ですが当事者も必ず入る、とにかく家族と専門家を入れてプログラムをきっちり組むというのがオランダモデルの考え方です。日本のモデルは緩やかなものが多いと聞いていますが、オランダモデルは緩やかな雰囲気の中でもきっちりとプログラムをつくるのがコンセプトです。主な特

長としては、まず交流の機会を作る、もう一つは必ず Q&A、質疑応答、ディスカッションを行う、それからもう一つはミニ講話、勉強を入れる、この 3 つを必ず入れるのがオランダのコンセプトです。

「土曜の音楽カフェ」のプログラムは、カフェスタイルと生演奏を最初にやり、そこから専門家の方、施設の方、看護師・精神科医師の方、本年度の計画の中から丹野さんにもお願いして当事者の方の講話も入れて、カフェタイムと音楽、最後に Q&A やディスカッションをする、このプログラムを絶対に崩さないでずっと継続して月 1 回ずつやっていくことを行っています。今年度は月一回、8 月と 1 月はお休みして 12 月まで予定しております。

(蓬田委員)

参考 3 の資料、宮城県グループホーム協議会の平成 27 年度と平成 28 年度の事業計画資料をご覧ください。今年度の大きなものとしては 9 月 29、30 日で東北ブロック大会をアエル 21 階で行う予定です。厚労省や、レビー小体型認知症を発見した小坂先生、認知症介護研究・研修東京センターの永田さん等にいらしていただく予定です。

オレンジカフェなつぎ塾を平成 26 年の 8 月から始めて、27 年度に六郷地域包括支援センターと地域資源マップ作成で関わらせていただく中で、カフェとの繋がりや資源マップを少し活かす方法で今年の 10 月頃、ミニ徘徊模擬訓練の計画を立てて今一緒に考えている体制であります。やはり単一的に終わりにするのではなく発展させていくような形での取組みをしていければと考えております。

あと、レビー小体型認知症サポートネットワークのご案内です。これも小坂先生がサポートする形で立ち上げて現在にいたっております。

(井上委員)

私の関わっているものをご紹介します。参考 2 「認知症カフェ・家族交流会」の 3 ページ目にある「おれんじドア」です。丹野さんが代表となってやっているものですが、これはカフェとは少し違います。認知症と診断されていなくても構わないですが、もの忘れなどで不安を抱えている人にドアをたたいてもらいたい。そういう中で、当事者である丹野さんが当事者の相談にのるということを行っています。その後丸一年を迎えまして、1 回あたり 3 人から多くて 6 人くらいの人達が毎月第 4 土曜日の 14 時から 16 時、地域包括支援センターの職員さんが紹介して連れて来てくれたり、様々な医師達が診療の中で「こういうものがあるけど行って見ないか」と紹介された方がいらしたりしている中で運営しています。そういう中で、診察の時にはすごく緊張している顔が、「おれんじドア」に来て丹野さんと話して、次の診察の時には全然違った顔つきになった、いろんな不安な気持ちが丹野さんと当事者同士が話すことで笑顔になって帰って行くというようなことを目指しております。

最初は、当事者向けとして当事者だけの相談をと思っていましたが、もう一つ重要なこととしては、連れて来る家族や包括の支援者の方々の交流の場を設けることにしています。ご家族は「本人は話すことができない」と言いますが、当事者同士になると話すことができる。細かくすべてが聞こえるとやはり本人も家族に聞かれない話もあるでしょうから、声が何となくは聞こえるけど内容までは聞こえないという距離感の中で、でも全く遮断してしまうと不安になってしまうので、顔は何となく見えたり声は聞こえたり笑い声が聞こえたりするところで、家族は、なんとなく聞こえるような状況で行うことで不安を笑顔に変える取り組みをしています。それでようやく一年間やってきて、見学者も包括の人も見学に来ていただいております、見学者もたくさん増えています。先程の土曜の音楽カフェと同じ場所、東北福祉大学のステーションキャンパスのカフェを借りて開催していますが、見学者も新しい人を連れて来てくれるパートナーなので、なるべく見学者が見学者にならないように同じ空間を共有できるようにしています。結果的に1回だけステーションキャンパスが使えなくて、市民活動サポートセンターの会議室のようところでやったところ、雰囲気は全く違い、やっぱりステーションカフェの場所的な雰囲気がとても良いと感じています。もし皆さんも、本人が悩んでいたり、デイサービスという感じではなく、カフェにも行って何するか分からないという人がいましたら、ぜひ「おれんじドア」に繋いでいただければと思っています。そういった意味では、おれんじドアはずっと居る場所ではなくて、今までの一年間見えていますと多い人で3回から4回くらいの中で次の場所に、例えば認知症の人と家族の会の「翼」やカフェなどに繋がっていくことが起こっています。

もう一つ、泉区の将監では「さくらカフェ」を開催していますが、将監包括支援センターとめぶきの杜グループホームとシンフォニー将監の三つで、地域中華料理店を使って地域の人達になるべく来やすく入りやすいという形で、しかも全く違う三つの法人と一緒にカフェを運営することを行っています。最初はデイサービスの場所を借りていたのですが、そういったデイサービスのところに訪ねて行くよりも、いつも行っている中華料理店なら入りやすいという形で来て下さる方もいます。いろんな事業所の皆さんと組むことで中華料理店も貸しやすくなる、それでも中華料理店の営業時間外の14時～16時という時間で行っています。

(佐々木委員)

私の施設では「葉山オレンジカフェ」を開催して数年目になるのですが、「オレンジカフェ」としては早い方だと思います。だいたい毎月平均で7～8名の方が来ています。場所は施設の喫茶店で定休日の月曜日に開けて毎月開催しています。特長はオランダ式に近いものですが、若干違うのは、気軽にお茶が飲める、講話もある、それから相談にもものれるということですが、一つには本人達の希望をまめに聞き、その内容を入れて次の中身に活かすようにしています。どういうことかといいますと、家族の方が来て、家

族の中にはオムツ交換が大変だとか、どこの施設に入ったらいいのかという質問が出された場合、それをもとに次の講話の内容を決めたりしています。また、男性3人が来た時に、「男だけでも集まりたいよね、月に1回では足りないよね」という話がありましたので、平日「オレンジボックス」という、お茶を飲んだり、将棋や囲碁で遊ぶこともできるスペースを作りました。ただ「オレンジボックス」の参加者は少ないですが、「オレンジカフェ」はボランティア・スタッフも入れて10名多いときは17名くらいです。

ちなみに、サポーターをここで使いたいと思って声掛けしていますが、なかなか増えないです。サポーターの方がどこで活躍しているのか？という話がありましたが、やっぱり活躍していただかなくてはいけないと思っています。そういう意味では我々認知症介護指導者も協力していきたいと思っていますし、逆に一歩進めて、丹野さんはパートナーという言い方をしていますので、認知症パートナーとして仙台版で、2～3時間の研修では物足りないと思いますので、基礎研修とか両方受講してさらにプラスアルファの研修、当事者の講話なども入れたものを受けたら認知症パートナーになるような、実のあるネットワークを作れたらいいと考えています。

(鈴木委員)

今のお話の認知症サポーターの方々がどこで活躍していくのかという中で、サポーターがパートナーに変わるには、サポートされる側だけではなくサポートする側が喜びとか達成感とか、そういうものが必要ではないかと感じました。今お話にあったように、認知症カフェとか、そういう中に入ることで認知症サポーターになったことが活かせるような関わりができるようになったらいいかなと感じています。

仙台市の方でもたくさん素晴らしい事業を行っていますが、その事業と事業の横の繋がりといいますか、事業と事業の連携がない中で、一番分かりやすいのはサポーターの話で、サポーター講座には小学生や中学生、高校生の方も参加していて、小学生でしたら10年すると高校生になるくらい、高校生なら10年したら社会で中核的役割を果たす年になる人達が、サポーターの資格講座を受けた後に、その後どんな実践とかキャリアを積んでいくかということで、小学生は自分の仕事を選ぶときのきっかけになったり、そうでなくても社会の中で認知症の方と関わっていく中核的存在になるのではないかと感じています。その中で老健にどんな役割ができるかなと考えた時に、先程、特養の方に小学生がボランティアや実習や見学で来られる話がありましたが、来られるのは学校単位ですが、小学生・高校生のサポーターの方がもう少し認知症の方と触れ合える機会を提供できるような形で老健が果たせる役割があると感じています。

(賀澤委員)

宮城県精神保健福祉士協会では認知症への関心が強く向けられているわけではなかったものですから、今年度認知症の研修であるとか、若年性の理解であるとか、あるい

は地域の中で暮らしやすい生活支援のための精神保健福祉士の役割といったことで何かできたらいいと話合っています。

認知症初期集中支援チームで初期介入していただいて、その後診断まで受けて、そしてまた地域に戻って地域の中の支援に結び付ける、こういった一連の流れが、今きちんとサポートされている方がいるでしょうし、それで途切れてしまっている人もいるかと思えます。その辺の実態がどうなのかということと、地域の支援体制に繋がっていくにはどんな課題があるのかということと一緒に共有しながら、その課題に取り組むことが必要ということで、認知症を取り巻く今の課題が当協会の方でも意識を高めて初期集中支援チームと繋がって一緒にやれたらいいと思います。

(菊地委員)

特養の入所者は認知症の方が多いものですから、非常に悩ましく思うのが、特養の入所申し込みできるのが要介護3以上ですから、要介護1、2の方は特例入所といって認知症がひどければとなりますが、なかなか介護認定の審査会でも認知症があるにも関わらず要介護3までいかないとか、場合によっては要介護1、要支援の状態の審査がおりないと、それでも在宅の方たちが大変な状況で介護している方も大勢いるので、何とか手を差し伸べることができればと思っていますが、直接的にあまりできないというのが現状です。

認知症介護実践者研修を職員に受講させていますが、さらにもっと、できれば介護する職員全員に受講させたいとは思っていますが、なかなか現実的に施設で介護していく中で研修に出してやれない現状もあり、今年は何人だけという感じで苦勞している状況です。

(矢野委員)

先程、認知症カフェの話がありましたが、地域包括支援センターには今年度、生活支援コーディネーターが全包括に配置できましたので、専任の職員なので、地域にどんどん出て行って情報を集めているところです。既存の情報をまとめるのは勿論ですが、地域に出れば出るほどいろんなものが埋もれていたことを発見しています。何かやりたいという人が地域でたくさんいると感じていますが、やはり簡単にはいかないのが、先程の話にもありましており、いろいろなデイサービスとかサービス事業所を巻き込んでやっていくのが一番馴染むと思っています。

ですから、施設の方とか何かやりたいことがあったらどんどん包括に言ってください。包括はそれを繋ぐ役割だと思っていますのでよろしくお願いします。

(古積委員)

ケアマネジャーが認知症の方のプランを立てるときに、認知症＝デイサービスのよう

な考え方がすごく多く、フォーマルサービスに繋げることが当たり前のように、それしか考えられないようなところがこれまでありました。しかし今年度からケアマネジャーの研修の改正がありまして、今まで認知症の方についての研修がケアマネジャーになってから3年以上過ぎないと具体的に見ていく研修が無かったのですが、今年から研修の形態が変わり、最初の段階から認知症の項目が盛り込まれる研修になり、フォーマルサービスだけでなくインフォーマルなサービスも活用しようというところで、カフェを紹介したり、本人をきちんと見て本人を中心に考えるということを研修の中でやっていくというように変わってきています。カフェが増えていけばその方に本当に合ったサービスにつなげることができるのかと思います。カフェに行った方の感想がデイサービスに行ったときよりも全体的に良いと感じています。自由に気楽に行ける雰囲気が良いということで、皆さんの表情が良い状態で帰ってこられる方が結構多いので、カフェがどんどん増えていってほしいと思っています。

(蘇武委員)

世話人が主体的にやっているところも含めて11ヶ所に関わらせていただいています。「私のまちにはいつでも相談できる場所がある」という形を作ろうということと、「家族が幸せなら本人も幸せになれる」という二つのキャッチフレーズで、何をしたらいいだろうと考えています。太白区で生協の店舗を借りているものなど、さまざまなカフェを開催していますが、皆さんが何を望んでいるのかというところを探っていき、三つのタイプに分かれて活動しています。交流と相談だけの従来タイプのもの、それから「家族が幸せなら本人も幸せになれる」ということで家族に和んでいただくために歌を歌ったり手仕事をしたりするとか、気持ちをリラックスさせるということを半分くらい組み合わせ合せているもの、また、認知症ということを度外視して、おしゃべりから始まって、それで2時間過ごしてしまうもの。私どもの分も含めてどういう形がいいのか、カフェをやっている数があるだけ振り分けができる。それから、「家に閉じこもっていないで出てきてください」という働きかけをしているわけですが、1ヶ所で1ヶ月に1回開催ですが、数が多いことによって数ヶ所に家族が行くことが随分みられるようになってきました。悩みを持って1ヶ月後まで待つのではなく翌週も同じ仕組みを違う所に相談できるというリアルタイムで相談できるような形ができていることは素晴らしいと思いますし、仙台市内のいろんな所でカフェが増えてくるということは、そういう形の導き方ができると考えていますので、これからも期待したいと思っています。

それと家族と本人がどうしても距離や垣根があることをどうしたらいいかと考えますと、土曜の音楽カフェを参考にしながら、あるいはどうしたら和んでいただけのか考えた上で、家族と本人が同じテーブル・同じ意識で活動できるということで、今、長町地区でカラオケカフェをやることを考えています。東北第一興商さんの力を借りて、ビックエコーの場所を借りてカラオケカフェ、家族と本人が一緒になって歌うというカフ

エをやってみようとしています。時間のある方はぜひ顔を出してほしいと思います。

いずれにしましても、診断を受けたばかりのご本人や家族で行き所がないという方などがここに来ていただき、その方々が話している間、ずっと暗いところからスタートして終わりの方でようやく笑顔が出る方がたくさん増えてきています。ですから、そういう方々を受け入れる所が必要だと考えます。高齢者の方々のまだ大丈夫な方、だけど認知症になった方を集められる、そういったところからもう一歩進んで地域の中にも、本人や家族といっしょに語り合える場所、話し合える場所というものをぜひ進めていきたいと思いますので、皆さんのご協力をぜひお願いいたします。

(山崎議長)

カフェに関しては、タイプとして地域交流型・家族交流型・本人交流型があると思います。地域交流型といっても、本人＋地域交流型、家族交流型といっても本人＋家族交流型、などもあります。最終的に本人にとってどんな役割といいますか、どのようなものを期待されるかということですが、一つはセルフスティグマから解放されることが最も求められているのは実はご本人であります。それを地域のスティグマを何とかしながら、最終的にはセルフスティグマというのを減らしていく。それと居場所づくり、今動きとしてあるのが、ワーキンググループという、主体的に自分達の思いを発信していく場づくりです。それが、丹野委員や井上委員らが日本ワーキンググループみやぎを今、仙台市、宮城でつくろうとしています。そういう意味では、各カフェあるいは家族交流会で本人が何か発信しようというときに、丹野委員らのワーキンググループにつないでほしいと願っております。

本日予定されていた議事は以上でございます。

(事務局)

山崎議長ありがとうございました。

それでは、次第の 5 報告事項に移ります。宮城県長寿社会政策課よりのご報告でございます。

(宮城県長寿社会政策課)

今年度宮城県の取組みのトピックス的なところをお話させていただきます。参考 4 の資料「平成 28 年度宮城県の認知症対策事業（トピックス）」、「若年性認知症の人が利用できるサービスガイド」をご覧くださいと思います。

宮城県は認知症カフェ設置促進・普及啓発事業として、平成 27 年度から宮城県認知症グループホーム協議会の協力をいただきまして認知症カフェの取組みを実施してまいりました。報告書ということで、認知症カフェをこれから始める方向けの手引書というものを昨年度作成いたしました。こちらは県のホームページで公表させていただいて

おります。先程お話がありました。カフェはいろいろなところでいろいろな主体があります。実は県内で地域差があるのが現状でして、仙台市のようにたくさんあるところがあれば、まだ数が少ないところもあります。昨年度作成しましたこの手引書を活用しながら、今年度は各圏域、郡部の方でもカフェというようにご本人・家族が過ごせる場所ということで進めていきたいと考えております。

2番目ですが、若年性認知症実態把握調査ということで、昨年度、こちらは認知症介護研究・研修仙台センターの協力をいただきまして、一次調査・二次調査ということで実施させていただきました。成果物ということでサービスガイドを昨年度作成させていただきました。かなり好評でして、若年性の方と高齢者の施策とは合わないところが多々ありまして、雇用ですとか、障害ですとか、今後施策を絡めながらやっていかなくてはならないと思っております。その一環としてまず三次調査ということで、昨年度はアンケート調査でしたので、今年度は交流会型でのヒアリング形式で調査を実施したいと考えております。現在、認知症介護研究・研修仙台センターと相談中です。

3番目としまして、歯科医師・薬剤師・看護職員向け研修ということで今年度から新規の事業として実施させていただきます。それぞれの職能団体様と打ち合わせをいところですが、この内、看護職員向けの研修が診療報酬の中で位置づけられたということで、かなり、看護協会への問い合わせが殺到しています。精神科と小児科を除いたすべての病棟で算定できるということでございまして、一般病院の先生方の関心も高いということがございます。関心を寄せるきっかけはいずれとしても、この研修は三日間をかけて実施する研修で、認知症についての知識だけではなく対応についてもきちんとやっていただく研修になっております。各協会のご協力をいただきながら今年度展開していきたいと思っております。

(事務局)

付け加えさせていただきますが、最後の歯科医師・薬剤師・看護職員向け研修は今年度宮城県の方で仙台市の団体様にご参加いただくことになっております。次年度に関しましては仙台市での開催を検討させていただきたいと考えております。

その他、委員の皆様から周知事項はございませんでしょうか。

(佐々木委員)

映画上映会「ゆめのほとり」についてご案内します。これは北海道の認知症介護指導者のいる施設を取材したドキュメンタリー映画ですが、非常に良い映画です。認知症のことがよくわかり、ケアのヒントになることが多いかと思っております。認知症介護指導者の役割も解っていただけると思いますが、何より認知症の方のことが良くわかる映画だと思っておりますのでよろしくお願ひいたします。

(事務局)

次回、第2回仙台市認知症対策推進会議の開催でございますが、来年1月末～2月上旬頃を予定しております。大変お忙しい時期かと存じますが、ご出席を賜りますようお願い申し上げます。

以上をもちまして、平成28年度第1回仙台市認知症対策推進会議を終了いたします。お忙しい中ご出席いただき、また活発にご議論いただきましたこと感謝申し上げます。